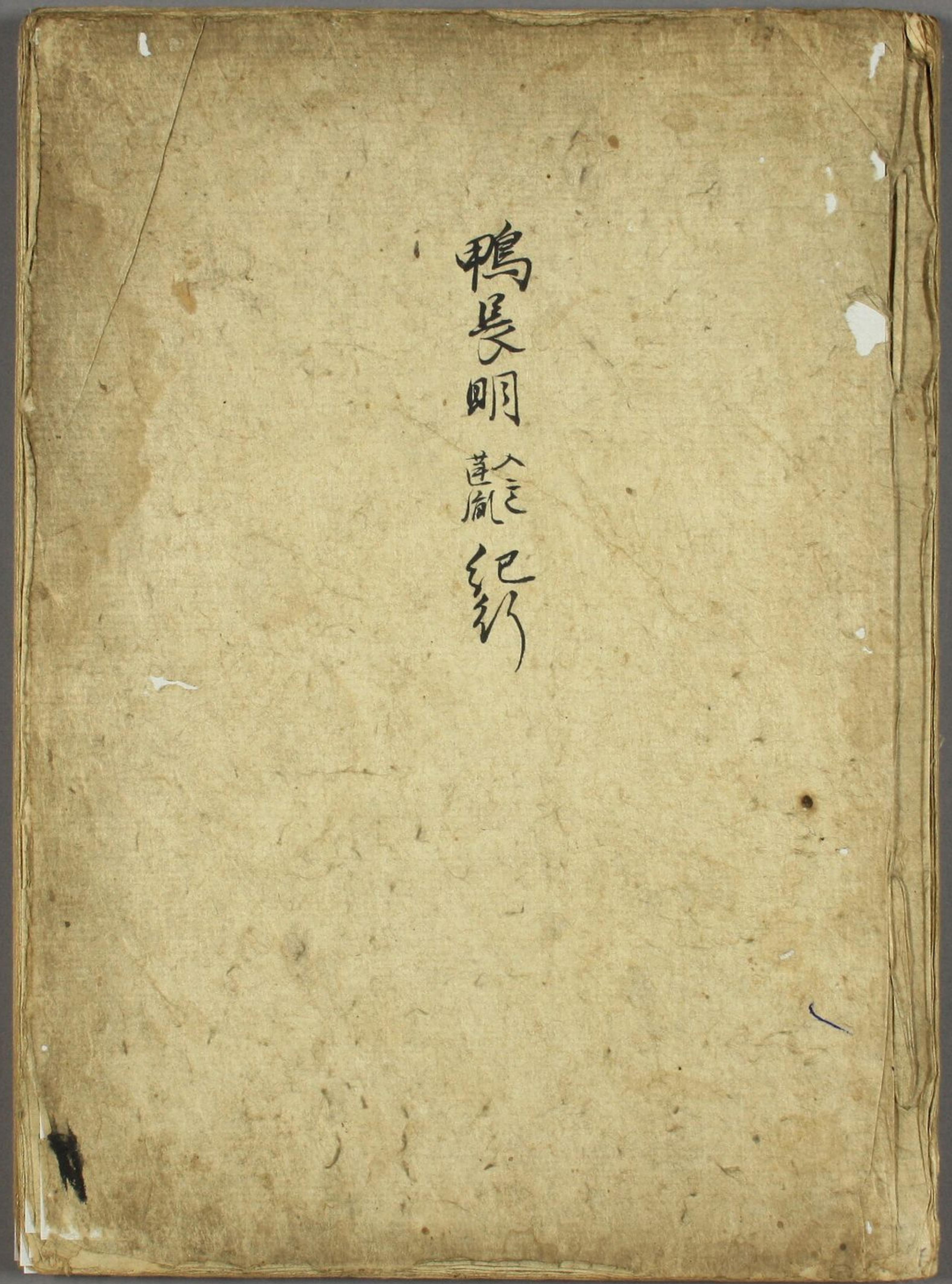


鴨長明  
蓬萊記



6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5

まし、百年れば、まちうまひんべりとすくち  
一とじて、むかへざれども、すくすくや  
のよばれ、きくいつけすくもつーと  
ゆゑまとめゆるきぬがれ、うれ白矢天乃カハ雲  
にせ、宋かへは、嘉小始に、と書、今、さへも承  
かりあらず、ととて、色然せ葉、を處す、  
すたて陶隨々卿のすみ、代とじたるを、御山  
のたくの森を、いりとまこととおほき、みすみぬやされ  
ヨリキ、ヰ都の、ほくにすまゆく人、アミ、世、シ、  
き、小、んほく、草木、おれ地す、まちあ、朝市に、有、ス、  
湯、近、ある、いれ、うそ、うそ、御、れと、お、の、に、治、三、年  
乃、秋、月、十、日、ま、の、一、う、を、成、山、東、一、か、し、く  
こ、あ、ま、く、ぬ、ま、ち、あ、え、山、き、れ、と、は、ま、う



の、よく様な、近頃才覚もあらず、下に實せり  
てを思ひとるつまうといふ事也  
小一ノアラシのとがのわは半身

はのとがのわく半  
ノ

東三奈院至よりて還却わをすも冥れはすまつ第  
行はるゝ事もたゞひづけ御下  
あまみ 丁ひ引あはば乃  
冥れはるゝ事もひづけ御下  
ゆふ乃 うち下へあゑ小ふわれんれせキ山をすめれ  
うちてれも歎宋津乃御サルモさけも心まと夜乃うち  
サレハさとくすも近江が人也  
大和を皇代時大和國の  
れんじゆのえと丘は志賀郡かづりあらそ  
大津のえひ津く庭れどさきのとせやとせやとせやとせ  
乃江不とゆりくわざれど

さ、うみやが  
わくわくの水  
うれしき  
わくわくの水

わゆるやうなぞとて沙田の  
もぢゆるわらはれの湯  
はくもんとせんかひ出  
二とふもゆくえつか

このやへびニヤアシル、  
はやくわがまへい  
てかうそアソシ  
社鬼モテテ  
のちれあきつ  
にぞ小ゑひ  
たを

之の本は  
三月に  
それが  
くるま  
せかま  
はる

河口の里へすみとしめまよはば乃かとく遠  
く三かの宗むきじせりさへすりやかに持ひたちはる  
ももさくちと西山に就ひゆきまほあびくとくく  
すたびとす先ニテシカ入ちひくわへうてれと  
たふすが野のちじゆくひちかうみわへとく  
おばきとくらへあきとふくまきとけりまを  
すま、たひわちくとく家業をまわるふんせくすゑ  
すりうへわの川家出をまきうちと見とせゆ  
ゆく人ひとまぬまとくとくと  
くのすまうやくとく  
の有ふいとくめおれ考せ翁れ多合つ、老翁はひく  
まきとせじちふ、うえにまひと見ま  
め翁をもせしゆとくわくやくやく

と第へと高をこまわひあひおぐみふと當  
こちうわきくうちすにぬ

たらうくよすにせんくみやみ  
あぬにまえせうやうすとく  
御苦ぬれいじよとくあるれあた黒小豆是ぬまく  
ちうれもゆくと株のあふらまにかくつ都はう  
し、うくとくえうちひまくおちうよ達のまへ先のそり  
かづれくれ邊憂のゆとまが羊せいをもの通を  
くやねえと氣せりまを手流せすゆゑに侍  
けれとてきくわゆ

都山くくらむのゆかゆくふ

かくさひの夜舞ノ物

七言歌合を歌ひて三ひかとにむちとま

うねくうトテがま多度せすがまへ行なせば  
うつねくうのゆくひゆくわ

不くもえとて代下山

却く坐一醒升伏せれいがき本枝岩根を流る  
其とじまくまつまくすむわきとくかくく  
河紫斑姫仰、立まれ霜林しづかくともくわすれ  
奴れはまとゆきをなれとも立まじてやまとくまに  
いそれと彼西行、えはれにまれを柳う希  
志けとくふをきくはきとくをうけられしむ

まち八處出づけのほれひすふとく

志行すまへる旅人甚矣哉

柏木山シニテ御宿を更に山中よりて宿の旁に宿  
カトつき嵐松乃木にて御宿なりて日暮七見度  
のトミナラシム也アホシテ越後ノ川本被の度至  
壹毛の板ひ一千年ハ先也元也未モ後赤陵移改後  
あれホーのちハナト社地とぞよまとた風ノシカ  
出レニ此ノシカ風也もまたとぞ此ハ空トヨシマガ  
の荒丸とぞ小なりくえあはひすともすばく  
ルと川とよシカツハ無事トモふくわゆリ所ハ空  
えれハ群の空也乃晴空オヨギツ川原ふうつひて空也  
とくし兎也、空トヨシモニキヤハ流わう丸ノシカ  
アリテ流乃トモアリトカツカツニキタニシルノキアリ  
ハテハアモウテ花渕が山ニ日杭掛リハ高リテ一  
木

志行すまへる旅人甚矣哉  
情けあ延一チモセ言フ、あくサルシテ承乃達子に書  
つすほし

志行すまへる旅人甚矣哉  
カク此流麻れ月、伏見ルヒト  
カ前の大病は、すくすくアマモトヘトモヒミ  
は、イヒのち、余の身も今ハ市も皆に丸向たとなヒミ  
ソテラ、健還れ多シホムルヒキ、了承矣はとシカ  
ズミツシナヤ人ふとんヒトモヒキ花乃キ、ナヨハテアリ  
スル

義理の國摺内をかいを取神垣乃あるとちうれ

尾風の國摺内をかいを取神垣乃あるとちうれ

居りまやでかみだまふおと  
きの木の下を夕日が西たぐひて、傍小糸れ  
とれぬるあふらはく神がいたるもあまよひ  
つねとおれ本まに來ゆきぬけのはじなうほんて  
とが一もさよひよりまにちゆをくもをも  
こうすくさにゆゆふにえましま、盡鳥比三ミサシ  
サキもあめくとめのまえ佐さ力り、雲たつと萬  
の風をうよきしれども、まわらきのう景行の星  
乃本神カミやくせぎくとせれ井モリ、御者墨行の御子  
日ヰ御ミツキると年夷タガハたわらやて帰りたまと氣物因  
小と氣ヒたまも、美一條度のゆ村大に政事シヨウと云う  
士有シヨウとも保ホぢにわ、アミもあめのまくわりりを

ア六般若ロクボンナツ般若ボンナツ而して佛書ボクシはあたまを亂す  
吾祖すふみちぬ任取ミタケとて在アリとす朝  
いまとくもくとくとゆきたらう、あむかふうわきを失フ  
おりひゆヒヤせざくと人ヒトとす  
法ハくとをきたじカジくとすは  
けまば立タチく後アフタかとしくわく方カタの月ツキの節セツを替シテ  
テとぞやくふくとせたひの月ツキをうふきをも  
てあれこれアレコレ。

かきとほりあく邊マツシをりく  
いそやうちのみちやすマツシを  
さうくあくらにあくらすマツシにあくら山マツシヤマをあくら  
すマツシ、移シテひんヒンたマツシ、あくらのあくらマツシをあくら  
あくらマツシをうきうきももとマツシのうきうきマツシ。

玉一けふせしゆくもく

めりたはははははは

まくまく三月のまつらひそとあえれ、在原の葉草、杜の  
さくみをなす三月ひときわのよになみをかへ  
けりほよとからしとされくちやくと見えれもりと  
おとまわらうてそのみれり、即

花せり、一けむ、うみの聲

いとまのつけづくふく  
源の義姫、けむのまことりの時と音をなすとにまし  
うすく、とすすみゆきがよやつむはる  
とのみやくもとくじとよをやまつてあましにふす  
あれやれ矢をまとえばまきまち山沙羅

赤坂とふ宿在て小あやひがんまゆふ大にの宣えの家  
ばせらを氣空を人の多ひすきもほーふあやひをう  
ぬらかねばかーミーまたもひらひーセーーものきに  
ねきのまきのくわくわくわく

あれーー、お家をもと、萬葉集

いとまわぬとて久

トじのうむー、じゆひいた、や万せみ草すにてて山  
竹く墨竹、秦田の一千餘里をえどーをしきく  
並たともふ茶葉をとなのむれをいれらんと床く  
わらわらとやれらざくらのゆ、小竹の晴分たるをかで  
りすもすも、ぬけす、れむすのほよきこのたも  
のとぞく、小竹をくじく、おれをれをまきのいま、陰  
たのひまく、なまくもくらう、あみちのとうをす連

そちやわを乃付置の事も望むるをうき  
たりを生ましれ、されば凡しこと  
えよス民のにか  
うとく紅葉のゆかとた乃  
まんてえの本末ハ古也之にたゞ、  
とすとおほれ

まくわくをあらわす

おやううれいがよりかまうせば  
はうぐくれきとみゆ波

之河をめ境小妻ノアシトテ中井に之りや  
川ナリ也なれ度く風の流せしとくも境川  
と云ふ

ハ止はひひ方とうとひ宮

ヤツル一の事ふまふらす

は一平とひこがくふせきぬれ少豆たゞくひあく  
京まつてうすすミタニは海湖あす海舟峰  
シワホ、小火を燃れむと人氣聲ふほくちまきともらるる  
須待とくさーぢくまきひくひばれわや  
ちきまふしき、まくひきはのまつともせまほ

行くまづばくぬしめのぬるまくゆをまくひまく  
えとすれ傳後ちるく、は傳若とす、やまく奈葉  
あさ立葉のぬこおひりくうれむひりく

山きよきの旅宿わふつモ、かくのひ

もきてまづれむすすすまく

あくもは篇イ一未三事だゞ一宿あやあやだる  
ヨリヤクニ五くまくまくまくまくまくまく  
イサクシーハリトキホーとキミとあまみえれ  
す二一たとえととけしもく故本丸とふ崎  
を見り、もひどくもちがひえたてしよもへまく  
ひ

山の葉のふよもせけハのまくを

月のうみうみうみうみうみうみ

おうとあくまへとすくは富士ももじらへ山をすす  
やどふす、さのともとよとよにさきにまなみ南へ通  
くくはうふとく西わ海の流ら、錦毛彌草乃  
たひばと見ゆれ白いいたみのふねと、まほばれ  
る、此よりそのる、まきく、かひと、まき、煙風  
櫻、やうれ又わやの草乃いをとく小尺ゆ、渙人  
の客なよす三ケとあさんす、とゆきせふすれも  
ほくくとちりゆかふもちはれ方流、かくおれ  
とまけ、このゆきとはあひけ、く本條の觀音おこし  
まんゆ當なむちわき下、けくをりとせす、まのいなり  
のうち、をもとまへ、年月を送り程下と塔のまじて  
あまく禪余、アリ、菴葉人、アヒ、被音乃ゆ、か、一、年  
ハリ、うそ、セサガ、京と、け、萬石、じつ、仰堂

造はきぐるみのうてゆわきと紫の逆糸よこのじ  
あそりあひきふ色を御葉び造りけよと、今夕く年免  
とねよする火あくと御裳口までたれ、ふひきのあひ  
く、あひひくらうむじあ、此花をつゆあさむうが  
歌書く、歌くきよ立ちの細ふしそひせられ、藝  
アふきことあくと、萬りもたのむとあひて  
このとしれいり、涼たけりみゆく  
小よよすのあいと、きく、小モ

天井と、ぬけだり、うわ、川原く流れ、まく、  
見ゆれ水を、紫きたくと舟乃去、すすやの  
ざく、往還れ、旅人、に、船、くじらひ乃、舟、ふるく、  
川志ミ、川と、なれたく、ひ多きと、ゆ、アガ、至、岐  
のうの、うれ、と、ひ、おうれ、いと、わ、ア、さ、ま

あらわれしもやがよだふにせまくせふれ  
えちかはりたきなみひだり

木川志もさきのれ井よりかへる

人のうねたくいと見ゆ

遠ひのまへに衣ぬえふ高きを一望してまつて  
わふあむの小船小棹せしと聞く浦の風を夕見せられは境  
あまわひとをすせんこびくとててく海小、松原  
乃是種ひよしや、も松のうねてみはひじめし  
石舟櫻花の有ゆき如きやさうのめ三り  
さうひと心せしすとわ風きすなぐはき

流の音と松のあわしい浦、  
さうの里のふとてあさき

おののうへせとせんかにむしわくまへせき

山すばすくわへはせうすとあはせう

よしよしよかくふたのひいふす

本のよきやうの志

修業せざる在今集は、争ふよきよきとよき  
たれやがてよがてよがてよがてよがてよがて  
いよくううがてよがてよがてよがてよがてよがて  
むくしとむくしとむくしとむくしとむくし  
いよくううがてよがてよがてよがてよがてよがて  
いよくううがてよがてよがてよがてよがてよがて  
いよくううがてよがてよがてよがてよがてよがて

ふみよよその機のうへ

よかよかよかよかのややや

おもひせきせきせきせきせきせきせきせき  
おもひせきせきせきせきせきせきせきせきせき

おもひせきせきせきせきせきせきせきせきせき

すすむをくじる大井川を見ても  
ひきこもるに一矢の流れがれど、  
さくへらひにうた地り、  
ひそやかなゆめくわにゆれ、  
てあれ先づ西門。  
りうふ、  
旅のあはれ、大井川  
のいふ、

またおとちとこち思ひのいます  
まくかへ山へ松の氣すきづれひなをそが  
あわすきみはいにひきよたてぢり  
まち流えもじりきたをとふむく  
こしれへなまつたの日本をよし思ひの  
あわくよきづれかけ

字は山をこしれば、つゝも心とむしのゆ  
とて、え葉平うすまさー一や小手つまーしきやと  
いはくわんわんと心くわくふたのやとくされと  
たり、ひれれ、春風の世経へかく、かくくまちあをちよ  
わくりづかす二、立ぐまうらうがうまわいがり  
のうち、ひとゝの僧あを絶像のあま佛を尊せ  
りて、洋古の法文をひかきをかくまふ、いゆよ  
が、笠山の不思たうぬれ、まうめ、とくのよ  
を、さーくゆきひこねづらまくもとくぬじまゆ  
ほ、さくわ、理が觀おまふ、うくを併がるすア  
性を、  
（能引易引れ二のまちよみ、かけたとと  
とと小中少種、まろも生ふあでくつと見てルトモ、  
まき、き、あくのが、一、ひはきて、なづぶ彦恭集

はくも冬の年月が、かく、かく、ひ、叙舟、  
を帰志を、ふ、入、なと、三春志、ひと、の、许由、  
穎、みの、月、す、ま、  
て、けいわ、の、あ、り、も、あ、ま、き、も、ア、た、と、れ  
ず、る、を、見、え、次、紫、か、金、う、あ、く、や、を、ま、く、せ、お、  
た、え、ま、つ、き、ぬ、ま、と、お、ゆ、孤、れ、わ、よ、そ、れ、ま、  
て、船、津、域、の、雲、の、外、小、す、多、き、い、も、の、と、ま、く、  
な、く、あ、れ、ふ、う、わ、そ、

世、故、ひ、ふ、え、う、お、く、や、不、キ、

の、山、の、復、承、や、く、や

此、<sup>彦</sup>、あ、り、く、往、ま、く、山、と、よ、こ、に、い、こ、り  
て、大、な、れ、卒、教、故、せ、一、け、よ、す、持、ま、と、よ  
あ、ま、か、よ、行、令、事、中、に、あ、ま、ち、ハ、ま、と、ま、

きんの山あぢれし  
うとまくわらはもかくふまけ  
よふまくわがほふきんうはる山  
ウカくソウあたひの御三也  
ササギちすくれたゞ、あま御ふるばるくはみ  
河原をも下たりさぬれのゆうへてつねれ  
は梶原の墓と見て善三又乃と云はせたとさ  
了うをとせりとを孔奉中納言の口すせ三又  
ハシルとくふたまやめいとくりとくり詩  
おもひ出づれくニル又ふきき詠せざれを名ふ  
ものなむと云ひ羊不傳のをもとわざと  
うかくをみとめすんうれ梶原へ將軍二  
代の國のやを武勇三零志不ひ得たりわざと

人をくみ見えけりひうすることう有りか  
ゆく忽一カガタうやす(さふぢにきれ)ハモリ  
中ものひんとおひりん都つて(死)トシモヤム  
すくの(ふさ)ハトミレホシとまふとゆ  
さハ家ぶて布をと(義)ふねをひ含き(後)成(後)慶  
(ゆ)じゆ塔(まみ)てのとれとくとよとうとく  
さ波す(ま)ひく塔(ま)  
よととまひくのとれ床(と)も  
たまらぬふす(て)ト(義)め(の)と(公)に及(御)そ  
松(ま)は(彼)うれ(て)一(公)あ(り)も(と)ふ(う)れ(て)ひ  
と(わ)か(れ)か(れ)か(れ)か(れ)か(れ)か(れ)か(れ)か(れ)か(れ)  
經(ま)は(ま)は(ま)は(ま)は(ま)は(ま)は(ま)は(ま)は(ま)は(ま)は(ま)

清見冥をすまへて志は一をしめハおさな  
じくへる者いふわれとまふりとふの塔屋型  
小塔にあつてはくらむすびとひよふら案あつては  
やどりもなきめきとアザモ也昔朱雀天皇代御是  
將つとも者あつまふと並深起一ノメモ以平<sup>ノ</sup>也  
ためようち北アセ忠文公はうべけり冥ふり  
てそもとけるは原の重藤とふと日アセとモ良  
て軍がんと云ふとよりうらに舟の火比新ハミ  
一て浪び棲碑路の経の有ハトアシテスくとふ  
唐のえどすめられ、海が國アセナリモとシテモ  
ゆれ

清見冥をすまへて志は一をしめハおさな  
じくへる者いふわれとまふりとふの塔屋型  
小塔にあつてはくらむすびとひよふら案あつては  
やどりもなきめきとアザモ也昔朱雀天皇代御是  
將つとも者あつまふと並深起一ノメモ以平<sup>ノ</sup>也  
ためようち北アセ忠文公はうべけり冥ふり  
てそもとけるは原の重藤とふと日アセとモ良  
て軍がんと云ふとよりうらに舟の火比新ハミ  
一て浪び棲碑路の経の有ハトアシテスくとふ  
唐のえどすめられ、海が國アセナリモとシテモ  
ゆれ

せと地をくぬかふかきつとふ、浦みへてひひま  
泉ふをとくくまきたれハ壁にほりはうわくと  
お乃レア下からまくよやうてあれいゆれ  
きよみと歴迹一ちふとひ松

とすとさふまくじるくひがくつら美すま  
のまうか一され、疾きとせむあくきのすすむと  
くさく待とよざれ荒破ア岩せとくまやまくす  
しれいとくしよひつてひらうひがくとせ  
ほんまもなき神あくまくひけく井をばり  
疏のをふくらむちがを産れつてかがそ  
おキハツモサヤあくまくとせ

なまけこゝもぬれ  
蒲原とふ宮ま通  
わらわがふさりし障子によがき  
旅うすやくをさじ  
つむ山きとふくわまゆる  
わきんと昔香爐峯は葉す  
かえのゆへと、社びあきて  
うき今や富士の方の御堂も高めり  
乞をくわせ山乃ゆきわといれこれよ  
了手すくわればわ

さあせんやだれか  
くるねのきみが  
おひでに見え  
ぬよか  
ゆゑねが見え  
ぬよか

雪がれもえくさきの鳥もあればあゆ  
たをすゑと山を二えりて山更觀十七年  
のえのえと山のまゆあつて二へ山のとせ  
都良香の雲乃山記かきこられしやうり  
小一の根乃くとよどくとよどくとよどく  
わらうわらう袖うじきうじき

小はるかなる城のむじかなにうなづの眺望をうれしく  
とぞくふらうわざ（） しのばへし御室のまこと  
ごへく小浦を松島横（） しまよせも昔（） あのう  
ようひき蓬莱（） とうのしめせうく小舟うまう  
ては後（） ちんぶにけうとさくもとゆのう  
神佛のすうよをあわぐんといふくわくや（） ま  
三印

ノモトつい波の入はづくを折れ  
アリモシハシマツメ（）  
やまけホシ衣（） 千本のまふとし、やく海の浦  
きくいまくれふせひとてえむとの氣（）  
とす（） 仲小ハ船（） もよきうちひて木をまわすけ  
ヨド（） 小舟遊び才子株（） や小の双岸（） 一葉

の舟のオ乃（） 美里志勢坐（） つれぬ小河（） すみれ舟  
もうれ波眺望（） つくとも拂れとお  
アサ（） せやらどつまもすとを  
ミタ宋（） そくく経（） の之間  
シテ（） とよさとゆせ或りの布（） たれ、あみ給  
キシトウヒシとくとくすうもちよの風とてうこと  
にて床（） あしづうも野草（） はうと草（） 破縫（）  
のよの縫痕（） とくやねんとわぢ  
いとよあまうゆ袖（） の風（） し

伊豆乃、志府（） とおれ、三行（） そくうちあつ  
たくまうふ桟（） わー（） くわくわくとくとくの足（）  
七神（） ひきり（） いやーういよふふニ（） まの太郎

さうすてきとすとを能國入連伊豫を家へゆく前に  
おとくすくたゞきよりておれにじうもとたらめくとせ  
おにじつよひりておれにじうもとたらめくとせ  
かづりきるあくへうの山がれもかくはしとすきう  
けまくせがくくわうゆ

山よりあー一草代水のすれさく

まくあみさきかきよみの神

クギにあらなれいえきとせ立生くすなりき  
すやとふてれりくする山のや小山とて水とて  
つくたゞくする箱根の山とせとまくわの海と  
ふとおとせれれのとせりくする山と  
桃室の山よか川行らうむじ唐の蓬山と  
せとれ叢密石龕の山ふのとせりけ浅塘のと  
せり

山すとといつー一山すとは湯せり  
おもて山を渡たまひの山と法放すと  
とすりへよれみれわくとせ

山おをたぐちゆく湯せりと山の山ふとせり  
とアモウーしけくうちとくきて谷のみと  
さりまきれ山風の山とくじまく湯山房の山  
おきとせすとせりうは原の物語とくに山  
をとほん山のとくとくとひきとせり

せり

アルタスの山と山ふとせり

いめぬやうとせりたきのゆうれ

多きとせりと山と山ふとせりと山ふ

降り足りてかうへてうの内すとまく  
まく大坂に宿をうつて、宿まで入るといふ  
とまどしれしまわなくて、もとすきぬるうぶの見  
ゆゆきれしるやしよとり、きぬきもなま  
せいうと、さうふこをうづくを、のぼりの城の庵アマが  
うどくさんもとぬがは三歳ミツザイからして、四歳ヨウザイが  
駕すそれのそと、ぶりちうひ、うつへ山ちうじ  
てましむのをせ、車のを虫のよ、タガが、ふひうじ  
流店の都シテすすき、うとうとてうす、トード  
つ、山サンアヘ社サヘはれくとせんじて、正マサニ  
のほき、まえ、れみさきやと、浦ウラくわ  
てそれ、あまれ眼アマレイてあそればと、うげで、  
小谷コヤマたぐれも、スヰホスヰホと、おもひだるい

柳端翁リュウバンウ始ハヂばやと、右ムカシ將家ヨシキとき、(たゞ)水の尾  
の三ミ九クの世セも、うんウンび、ヨギヨギ、ふうけフウケ、ヤドヤド  
一イチ治義ヨシ、まゝわくママワクて義兵ヨシヒサ、ばあきて、朝敵アシテ、  
すくや忠義チヨウイを、あふそりて、將軍ヨウジンめー、が、將  
より業館ヨウカンが、うこうに、あせ佛アセボク、ば三歳ミツザイと、あうせ  
すくや、あひ、ま鷹昌タケイマサのゆと、れり、やくも、彦ヒコ、  
乃若ノハタ、松柏ソウハツと、よひ、あけく、蘋藻ヒラモのう、ア  
くうて、すく、陪ハサウせ、さく、めく、墨モクの御モク神乐モクジンロク、おれ  
く、の御掌モクシヤて、経ヨウく、月ヅキの夜ヨメを、云ハシか、れど、崇  
神スルニ、いづく、一イチが、社シヤ、うき、いと、ゆ、二階堂ニカイドウを、  
殊スルすく、れと、鳳ヒナゲシの、毫ヒラ目ヒラメ、と、座シヤ、鳥トリの鐘  
霜シロに、ひき、楠クスの、莊嚴ショウゲン、おけ、もと、林シバの、やうと  
了リじゆ、キモキモ、ゆふ、からまカラマ、て、ニ、ゆ、大オ、正マサ堂ドウと、され

山、石巖の寺へさがりて道場のわざをひひ  
うきへうと徳僧いをばくふ月おれり。祖宗乃  
観ひつぶく。妙法をばくひをニテ。かゝるを舊  
まえとおとす。あつみせ代く。持筆ひけく  
卫門へうれと松のす。ろ葉のつまちく。小川多  
モキは。湯井は。うと。ニテ。うと。佛の大  
佛。正徳と。サト。かく。人わや。やう。いもひくま  
い。されもたゞ。かく。かく。かく。かく。かく。  
をと。と。走は。のま。先上人。と。ま。あ。と。と。延喜  
の。高。を。買。あ。の。だ。き。か。や。さ。ば。す。や。佛。像。と。成  
り。堂。舍。と。建。つ。り。ま。さ。り。院。小。こ。う。宗。お。と。鳥。寝  
と。く。わ。ま。れ。く。ま。天。の。云。に。い。と。白。毫。行。と。と。元。う。ま  
く。滿。月。の。ひ。う。が。う。ま。か。ん。佛。と。す。み。や。ぬ。三。年。ア

功す。を。う。れ。サ。イ。堂。ハ。ま。と。十二。株。も。つ。み。(たらまち)  
ち。一。彼。あ。六。ち。の。が。も。ハ。般。武。と。皇。の。製。作。を。堂。十  
丈。余。の。模。遮。那。佛。サ。) 天。笠。晨。旦。も。頼。ひ。り。キ。佛。像。と  
ニ。セ。キ。シ。ル。き。レ。テ。孫。院。タ。ハ。ま。長。ず。レ。ハ。も。大。佛。の。ま  
す。を。を。を。洞。木。像。ア。シ。イ。メ。ア。リ。ア。レ。と。と。ホ。代。ア  
コ。モ。ア。モ。是。と。が。よ。とい。ひ。フ。—。佛。法。東。廟。の。見。き。リ  
よ。あ。こ。と。と。化。力。が。こ。こ。う。か。と。す。と。く。背。ゆ。か。ふ。の。そ  
つ。モ。が。見。さ。く。よ。く。氣。し。れ。—。と。か。れ。と。ふ。み。よ  
セ。く。う。を。残。す。う。と。く。故。ふ。往。果。座。さ。よ。人。う。も。サ。ま  
フ。ひ。う。風。か。か。き。は。り。仰。ふ。れ。ま。く。小。た。都。の。み。ふ  
エ。一。カ。サ。ヤ。の。ど。ひ。い。も。し。争。く。さ。り。く。株。ミ  
ア。カ。リ。モ。ち。あ。ヌ。蘇。威。う。漾。を。わ。り。ア。十九。年。乃  
疏。の。ア。ル。も。後。な。禁。ア。三。千。里。の。三。ち。の。四。そ。ひ

少しあきらめ心ちすれり  
山の音もすうりまく、松  
いぐらのあゝの音もさく  
じとくにがくまくされ  
懐中の歌をさきてはく  
むかのやがたえ  
さわるよ一叶せらぎ  
えふゆきとわたりす  
くさりもすばたぬひぬアモリ

十五日  
丁巳  
晴  
生

十月十三日あつます。小瀬翁成立。都。右のひく。  
左より。唐子アカギ。花。ぬま。山。す。山。山。山。山。  
さす。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。  
な。

吾妻鑑第十九云

建曆元年辛未十月十三日辛卯鴨社氏人菊大夫長  
明入道法龜休雅經朝臣之拳此間下向奉謁將軍  
家賓朝及度之之而今日當幕下將軍御忌日  
參彼法花堂念誦讀經之間懷舊之淚相催註一  
首歌於堂柱

じやまきあはれほふ山原

テ時正永五年八月三日

林川義久

